齊莖集

上編

上之一卷

醒。老人積年所著小說九百餘
虞初世態情實毫無不通稗史野
乘無所不窺若夫椎輪大輅質不勝
文名物混淆觚哉孤老人者感於
此參伍今昨指擿誣僞著為一圭名
曾董集鄉儒先生或嘲之云此瑣

者。何足以辨矣。吁。大舜好察迩言。孔聖
數誦童謠。孟子知齊東野語。班氏称街
談巷議。後世如田叔禾委巷叢談。胡元
瑞莊嶽委譚。皆是物也。骨董〻〻。非何
氏搜下物也。必矣。比彼不知而作〻者。
務的就箭。掩耳盜鈴。則大有逕庭矣。

余與老人同一癖。不得不為之一解
嘲也。文化癸酉冬日。杏園主人書于
緬帷之林下。

骨董集上編前帙目録

上之巻

○好事之心得 一
○竹馬 三
○蝙蝠羽織 五
○舊吉原雨日のさま 七
○臭を呼て斗ニといふ 九
○豆腐紅葉 十一
○錢湯風呂始 十三
○行水船居風呂船 十五
○伊勢風呂吹 附・風呂吹根 十七
○目黒餅花 十九
○昔威儀 附・紺屋之白袴 一
○昔人之質朴 四
○曽人形 六
○髭男 八
○粉之看板 十
○ところゞとの下踏 十二
○風呂犢鼻褌 十四
○石榴風呂・鏡磨 十六
○金龍山米饅頭 十八
○耳垢取 二十

○臙脂繪賣 廿一
○おかとといふ言 廿三
○浮世袋 廿五
○燈籠踊 廿七

中之巻

○名古屋帶 一
○かばやき・おかべ 三
○行燈 五
○女之・編笠・塗笠 七
○浮世袋再考 九
○大津繪佛像 十一
○重箱・硯蓋 十三
○釜磨・猫之蚤取 十五
○駒形之螢 十四
○初雪之句 十六
○火燵 附・地火炉 二
○挑燈 四
○笠の下に布を垂 六
○拮煙管 八
○臭板古製 十
○淺葱椀 十二
○二足三文 十四

○三線・鼓弓・古製 十五
○丸ぼくしの文様 十七
○祖父祖母之物語 十九
○打出小槌・附猿蟹合戰 廿一
○奈良庭竈 廿三
○宗祇之蚊屋 廿五
○紫革足袋 十六
○題目踊・蒔繪香合 十八
○排游・無木 二十
○ちまき馬・きうり牛 廿二
○長崎柱餅・并・幸木 廿四

骨董目録終

骨董上編 上首之二

骨董集上編上之巻

江戸 醒々輯

山東庵

○好事のゝ得

日本永代藏 [刻持ノ年号ヲ[illegible]ノ寛享の時代なるべし] 云むかし〳〵連歌師の宗祇法師の此所より泉州堺を[illegible]ゝ歌道のたゝりし時まづしく[illegible]本紫[illegible]をもけるに人めてあるじの白米の時胡椒をあひふまるに人めり座中へとりをきて一両うけて之をうけとるをかたづうふ一句を思案して付けるをさりとたとろざと宗祇殊外よろこあり[illegible]とのゝ云こ」とあり[illegible]ふ風雅を好も此志あるゝに家産を破る基をのらんなりひを蹴よゝとい風雅を好むあひいめるべゝ[illegible]られ人のたりたる話なるゝ宗祇のあめられゝとのゝるがめづらゝく且ワちらべのところえもとめたいぞう

○昔の威儀 附 紺屋の白袴 二

昔いたづの男女も威儀をたゝゝろのをりつらとも威儀をゝろゝとゝのたち

よをほひを正さうもる事あり 七十一番職人尽歌合 文安宝徳の時代 の繪ハよそぐ〜函く
高くくみ小素襖を著女ハ頭に布みて巻上の衣をうちかりて蒸又ハ折て
蒸てる体をゑりけるをもて考へ知べ〜 能の狂言ハ室町殿の御代其時ハのぞて
ぞらに丹あ〜たゆを作りいぶせ〜ありと古老の説あれば其出立も當時の風俗
なるべ〜されば女ハのぞたるよ白に布みて頭をにく〜み両のそ〜を右左ハ結たれて
これをもがう〜とのゝ掛衣をはぼ折て蒸さるも 職人尽 の繪ようく〜あくまいぬ
今ようあるを四百年ばど前の民の女の風体ハ能狂言のいぞたらをんておかむゆを知べ〜
南留別志 巻之二ハ云。田舎の女ハ木綿のひとへなる物を常〜たる上よきるを礼服とそ
古の小袖などのものなれるなるべ〜又そち巻をきるを礼儀とも職人歌合などの繪ハも能
の狂言ハもあるをぞ〜ありたみの女の装束なるべ〜」とあり田舎人ハ老実なるゆゑハ古風
を失ひど昔の威儀のそ〜ものぞ〜ら残ぞり○紺屋の白袴とゝハ諺今もいゝとも
ふるに諺なり 山乃井 慶安元年印本 巻之四ニハ「そ〜らにある雪や紺ゆゑ白袴」とゝゆゑあり 崑山集

慶安四年撰 明暦二年刻 ゆも此句を載て貞徳の句とあればあるなるべ〜案ハ當時の紺屋ハ常ハ
袴をきてゐるゆゑハ此諺もあり しかるに今の世盲人猿まねるゑの者ハ袴をきると
拵女の常ハ打掛を著るゑハ往古の威儀のなごりなるべ〜

○竹馬 三

唐山の竹馬の戯ハ後漢の時をぞよあれば ひとふる 御國の古代の竹馬を
唐山の竹馬とハ異なり葉のたれたる生竹よ縄を結びて手綱とそれハうる
かりて走るを竹馬の戯とゝハ竹馬の友とゝふるハ則是なり左よ摸し出せるハ
古ハをゑるべ〜今の世のぞ〜弱の頭の形よにく〜たる物よハあらぞ 袋草紙
雑談の巻ハ云。壬生忠見幼童之時内裏ようり有召無乗物とて難参之由を
申然ハ竹馬ハ給りて可参之由有御定仍進此歌

竹馬ハう〜ぜちハ〜ていとよるも今夕ハげハのりてゆるらん

夫木抄

竹馬を杖ゆも今ハたのむるハらハ拾びを毋りひいぞは〜 西行

竹馬小あたらうなれ〜そのあとのよういうれども忘れ申さる 九條二位入道知家

右の古歌を考るに或いうがちすぐ或い杖ともたのむといひ或いう

なれ〜といふことを古留の生竹小栗たいあるふくあくつと 異制

庭訓 遊戯の事をゐ〜べいつる条。竹馬馳といふことあり左よあらいを古

留の如く生竹を馬として馳らべる事よや異制庭訓い虎関和尚の作あれば

ふるたことあり 下学集 騎竹之年 指丫角之童子 謂竹馬之年也 とあり騎竹とゆるも竹よ

騎戯るゐの謂なるべ〜

○昔人の質朴 四

一代女 貞享三年印本 一之巻小云。此四十年跡まぢい女子十八九まぢも竹馬よ乗て門ど

小拵び男の子もさぶらつて廿五よりえ服ぢ〜小ゆくもぢらく変る世やなし」

按るに此四十年跡といつるい正保い今文化十年よりおよそ百六十七年

ゐど前ゐり當時の人情い質朴ゐて小黠うらぶるゆゐよゆく幼気ゐることあゐり今十八九の

女子さるあそびをしぐたくいらよいつる竹馬も今のぢらえ竹馬といありいまぢど古代のぢらえ

生竹欽

古代竹馬圖

此畫いえ禄十三年の印本

田光大師傳のうちより

摹出せりられい正和年中の

古画を摹して刻〜なる

よ〜あれい因きゐることく

正和年中い今文化十年より

あゐて五百余年の

ゐりえ昔ゐりゐるを

ゐりべ〜

五百年の昔のいらえ遊の情今とゐらぶるをゐるべ〜

狂畫苑 安永四年印本 小百鬼夜行の古畫を編し出せり其うちより此畫のり戯画あれども當時の竹馬のさまをうつる便あるべし 好古小錄小 本朝畫史を合考るに百鬼夜行い明德の比の古畫なり明德いまを文化十年にいたるまで四百二十餘年の昔なり猶の頭の形なる竹馬もあるべし物なるべ

百鬼夜行いさえて戯画の怪物
なれば竹馬よ足をとりたる
なるべしそらごとなるべ
唯そのあらひとを
こんのこ

唐山の古銅器小童児竹馬を持たる形を鑄たるあり銅色宋時代の物とのの鑑定あるこしそか臨本を得て竹馬のこを宣和年間の物と

本朝

鳥羽院の保安の比よりあるまり保安
より今文化十年よ
りてあるこそ六百
九十餘年なり古にをるべ
児五歳ばかりて檀車の
樂あり七歳よりて
竹馬の歡めりと檀車小
對してつれば唐山のい此畫の如き竹馬なるん
彼是を參へ考るに生竹を馬よ乘るい
日本樣なるん駒の頭をつくるい唐樣なるん
中昔よりこのこ彼も是もあり
るべ

○蝙蝠羽織圖

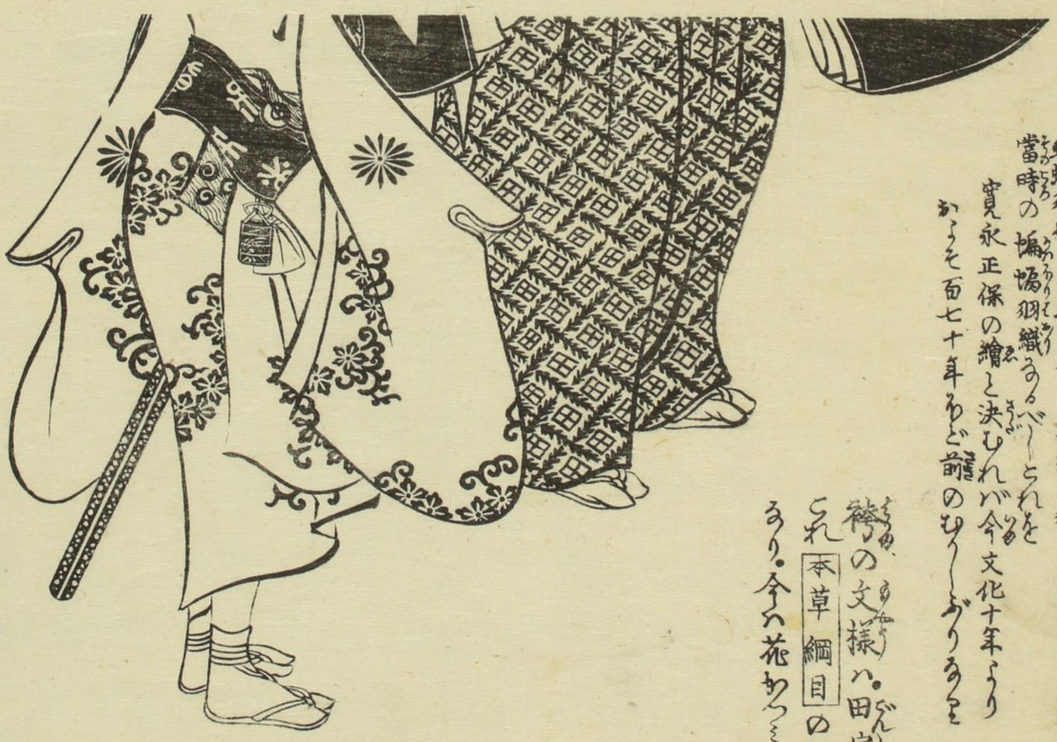
五

杏花園義

此繪筆者の詳なるべくも画風をもつて時代を考るに寛永正保の比の古画にてあらん其時代の繪に今をきてもるべきれば おわむかいなべべくべくとあるもの

慶安三年の印本 巻之双紙 上之巻よみ出した物の品々を ひつる条々に「袖ふくまんりいぐりたりまこ」とあれば 蝙蝠羽織とのことなるべし 此繪の羽織のもようたい 當時の蝙蝠羽織なるべしこれを 寛永正保の繪と決むれば今文化十年より おくそ百七十年ほど前のもようなり

襟の文様は田字草し。 それ 本草綱目 の蘋 ヒン ウキクサ なり。今は花もつくことなり



武清縮寫

○曹人形 六

増鏡うちの雪の条に「五月五日不断御ぶとの花くさ玉などいろ〳〵にあるかぎりめしよせ」とあり。また八十八代後深草院位につかせ給ひていとゝあるく世〳〵まち〳〵建長三年辛亥五月五日の事なり南畝叢書に載る某の随筆に右の増鏡の文を引て云曹花は紙をもて曹をはくなり其上にさうぶの花をかざるとあるひは紙にて人形をつくりたるなどいつらはのためをびやをるとあり今の端午の菖蒲曹は此遺制なるべし」とゝりおのれ此説によりてこゝろつけて日本歳時記 貞享五年印本のうちの繪をみるに曹の上に人形をつくりたる菖あり人形とは名目は原曹の上に人形をはくなりたる曹人形と別の物にあらず人形ばかりをも曹人形といひ畧して曹とばかりもいひたるなるべし然則右の隨筆に曹の花は曹のうへに紙にて人形をつくりたるなどとあるは説によく合曹人形は曹の花の遺制なるとゝ疑なくらん曹へ形といふの義もこれにて

あらはるゝなり尤に模〳〵あらはゝと菖をえて考へ始りのべし日本歳時記巻之四端午の菖蒲曹太刀の事をいふる条に「此事むかしは重ね紙に人形をかき射薄き板を曹の形にこしらへ或は菰の葉にて馬を作り或は木を長刀のごとくにしてこれを戸外に立侍り〳〵が近年は風俗美巧をこのみて木をもつて人馬の形をきざみまるくりとして彩色をほどこし或は甲曹をきせ剣戟をもたせ戦闘の勢ひをなさしめて戸外に立侍る是を曹といふ云々」とあり按に紙に人形をかき射板を曹の形にこしらへるとゝいふは昔の曹人形の質素のさまなるべし貞享の時昔といふるゝ

○園太暦文和四年五月五日の条に菖蒲甲の事えぶれが此名目も物ふるき事なり文和は九十九代後光厳帝の御宇なり

○閑に云山乃井 慶安元年印本誹諧糸屑 元禄七年印本等五月五日の条に菖蒲刀菖蒲のぶりなどふなりにて削製の甲と云名目を出せり木を削りて曹の形に作りたる物歟

貞享五年板
日水歳時記
巻之四に此器あり
左の書によるに如く人形を
あつき紙にてつくりぬきて
麻糸にてつくりたる
ものなり

曽人形圖 二種

此間い延宝天和の
時代の繪のうちに
のり草画にて
微細にしらべこれを
考證のひとつに
横〜いとぐち

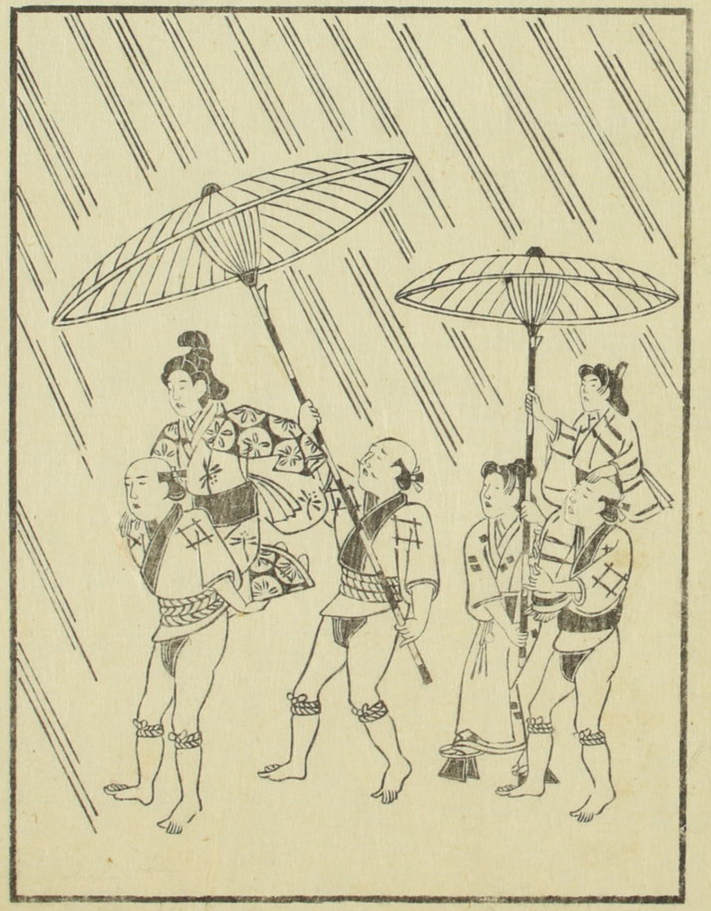
○書吉原の両中のさま ヒ

万治二年印本 私可多咄 杏花園 小云ぷ〜〜〜江戸のうつれめい花柔といふ所す
藏本
ちむ辺中畧此処乃遊君は両ふる時めくい道あーきまいろく拵るいなどあびふたる
奴のせるの小負てあたりありとあいと奥あれば〜んとぢ〜まにそや宿の門ふ入ぬれば
たれせらんよそ拵る
ほく井戸井づにうけ〜ろく拵縄負に布巾を肩もんざるまに
あとようきりのろい肩ぐまよてきるに全盛ちく〜ゑるるのれがられ辺ふり
つたて遊女ゑ〜
くらべ〜ふをけぐをの肩ぐ角い君あらどーてたれりあぐべき
とのんよみ〜とも 異本洞房語園 享保五年ノ記 小云ぷ和年中元よ〜京の比両のある時い
拵女ども揚屋〜通の小下男どりふおりれて行々りおられ拵い六尺い縄をりて常に
両のまをう〜ろふてをあの拵女いるぐた小袖まて足をほ〜みりもそを長くたまて

両の膝を六尺の手のうゝふのせて臂をそり衣紋ゝつくろひて後より長柄の傘をさ
ゝけさせたる絣ゝ品ゝえゝ」と呼り其古扇を摸しそ左ふあらいぢを貞享
元年板 三代男 詞花堂藏本 一之巻ふ江戸三畳の薄雲が揚屋入のさまを図たる
条ゝ云 紫立たる曙ゝうとぐもさまのおむりひふゝんつきの傘角助がさゝ掛
ゝ肩で風きゝつてちらゝぬる紫ゝ玉兩枝ゝ白梅落と詩人ゝどの詠むべ呼べ
角助が背中ふ乗うゝゆゝありさまゝ如来ゝゝふゝおられゝん身ゝうゝの光を
云ふ」とあれば吉原今の地ふうゝて後も負ゝて揚屋入ゝる事ゝゝ歟
○因ゝ云元亀の比ゝ高禄の武士の妻女も乗物ふ茶事ゝ嫁入の時も麻の
ぬゝきを着て負木とゝゝゝゝゝ尻ゝけてうゝゝさまふ負ゝてゝゝけるう
古老の説ゝを當時の質素の風ゝそび笑ゝも残ゝたるべゝ
○元吉原今の地ふうゝゝゝ明暦二年ゝゝ 私可多哉 ゝ万治二年の板ゝ
元吉原の時を去ことゝゝふ二年ゝれば證とゝるふたれり

右ふゝゝ 私可多哉 とゝゝ
草紙のうちに此繪ゝ
是則元和年中
今の大門通ゝ吉原
ゝゝゝ時のさまゝゝ
今文化十年ゝゝゝて
ゝゝゝ二百年ふ近き
背ゝゝ○ふり袖の
うゝきゝゝゝゝゝ六尺袖
ゝゝ衣服のゆたゝと
みゝゝ○下男ゝゝゝ
茶筅髪ゝゝ背
質素の風絣ゝゝべ

○右ゝゝゝゝ 三代男 の
うちゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝれば
摸ゝゝゝゝ



ゝのごゝゝ
興書ゝり

一万治弐己亥年季秋吉日

○髭男（ひげをとこ） 八

見聞軍抄（慶長十九年印本）に云「今は昔関東にて髭男をばかまへて〳〵髭男といひて
なむるものに諸侍髭を願ひまゐらする髭をば鍾馗髭とて諸人好む鬼髭左
右へつらねたる古記にあるは此髭の事なりといへど、されの髭をば天神髭とて武家
まかるのに好みたるはなしと云々」かく見ゆる詞のうちに當時の風体知るべし古画を見るに
髭なき男はまれなり昔は髭なき者は假髯をさへしてつくりしとぞ見ける 西鶴大鑑
にも髯男のことみえたり

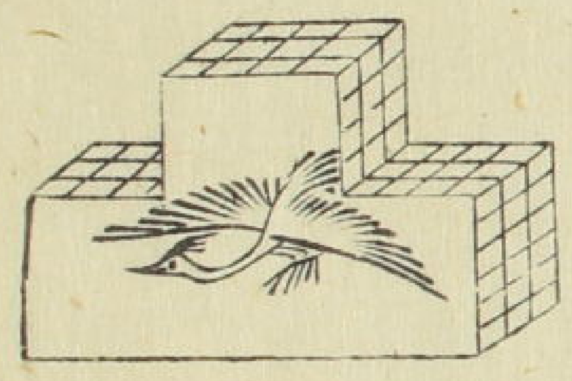
○臾を呼て斗といふ 九

饅頭屋節用集に云。和国兒女。呼レ臾曰レ斗。類説云。南朝人。呼レ食為レ頭。呼レ臾為レ斗也」とみえたれば臾類をとゝいふはふるき詞
なる泉の堺の臾屋に斗々屋といふ家号あるも此由なるらん

右節用集は林逸の作なり 辨疑書目録 植字昏目の部に節用集眞書本二冊文亀本とあり其後慶長二年の印本ありといふを知るべし 倭訓栞にも。兒女の詞に臾をとゝといふは芝峯類説に南朝呼レ臾為レ斗ストみえたり雖粗訛也といへり」とみえたり

○粉（おしろい）の看板 十

おしろいの事 和名抄 粉 和名之路岐毛能 とみえ 長明四季物語 小春のきたる
さうればかはりて云く空のけしきよくはれわたりてそなたのかたちにおしろいつけたる
處しまの所しもおろうこそあれ云々」とあればおしろいといふも古き称なり。さて元禄の比
おしろいの看板に白鷺をゑがきたる事あり左にあらはせる圖の如し按ずるにしらさぎ
のつらいふおもしろき物なるべし銭湯風呂屋に木にて箭をはさみ出して目じるしと
し弓射れといふを湯入といふにもぢらせたる類なれば更に雅なり。



白粉師看板圖
元禄三年板 人倫訓蒙圖彙にみえたり

○豆腐の紅葉 十一

堺鑑 天和三年印本 下之巻に「紅葉豆腐の事何國にも豆腐はあれども別して當津のを勝たりと古人より云傳へ紅葉と云名を加へたることは堺の櫻鯛のもてなし味はれば成べし」とぞ花に對する紅葉の縁あるべし又或人の云豆腐を人のかうと祝て付たる名ともいへり買様と紅葉と音便成る名歟今豆腐の上に紅葉を印を詞に就て取を顯すべし買用も通てう」めいまぶ今豆腐に紅葉の形を印る事堺の紅葉豆腐に始まるなり紅葉を買様に取るもの幼氣なれど昔は此類おかしきことこれいと色る名註にとるべくのよれを祝とも云るなり

○因に云古老の說に南天とは木は本名南天燭なり手水鉢の中に植食物のくいしれなどに成る諸毒を解するなり鏡の中に數又は裏に鑄付るなる南天を難轉に取て難を轉ずるといふ意にそする禁厭なりとなり

紅葉を買様に取るとも此たぐひなるべし能の狂言鱸庖丁といふ深草の土器にうんちんぐのかいしたをとるといふ事なり前にものぐ能の狂言にことなり

○ころびどといふの下駄 十二

文禄より寛永のあひだの古画をえらひに瓢簞を火打袋或は印籠巾著の根付とし又は瓢簞ばかりをもあびたる絵をあわしあげを傳て云瓢簞をあびる轉ざる禁厭なりとこれよりてありのよ江戸の名物ところどといふ下駄あり其下踏に瓢簞の形を印るも原彼禁厭のなるもの事なるもころびどといふの名をあらせるなるとなりなるこの物のれが推當言なれどもとありひとりあふもとよりき出る

○江戸錢湯風呂の始 十三

寛永十八年印本 「そぐろ物語」杏花園藏本に云「そぐろ物語」江戸ちん湯のこと寛永

十九卯年の夏の比かとよ伊勢与市といひしもの銭瓶橋のほとりにせんたう風呂を一ツ立る風呂銭ハ永楽一銭なり皆人めづらしき物哉とて入給ひぬされども其比ハ風呂ふちんれんの人あまた有てあらあつの湯の雫や息がつまりて物もいはれず煙にて目もあかれぬなど云て風呂の口に立ふさがりぬる風呂をとのみしが今ハ町毎に風呂ありびた十五銭廿銭づつにて入也云々」これぞ江戸の銭湯の始りなりしことをしるべし

○風呂犢鼻褌 十四

さてまたここに寛永正保の比の銭湯風呂の古図をみるに犢鼻褌をむすびたるまま風呂入する体などゑがけるは画工の心を用たる絵ならざるにやと疑ひおもひしに昔ハ民家のいやしき者も風呂に入にはかならずふどしをしたることは【一代男】天和二年板【三代男】貞享三年板等のうちにある銭湯風呂の図をみるに皆ふどしをむすびて風呂入する体をゑがけり【好色大門屋敷】宝永二年印本一之巻に朝湯して風呂入する事をいへり【御前独狂言】宝永二年印本五之巻に或人酒に酔風呂犢鼻褌をときて風呂入せしをあるものどもとく笑たることをのせたり

これ宝永の比まで風呂ふどしといふものありて常のふどしにむすびかへて風呂に入しとしるべき証なり

○行水船居風呂船 十五

【日本永代蔵】剞劂の年号なしといへども按に貞享の時代なるべし 四之巻に江戸の事をいへる条に或人船つきの自由なる行水船といふものを仕始て利を得たる事をしるせり【義理櫻】剞劂の年号なし画風をもつて按に宝永正徳の比なるべし 一之巻に和泉の堺の事をいへる条に「六左衛門と云商人の子なれば何がな身すぎになる事をと工夫せしに万事元手なければ取付く嶋もなき小舟に居風呂をしつらへ碇をおろしたる大船のあたりを漕ありきて一人三銭の極められし安き事なれば船宿までありて湯がはりまでも入まじど出来合を喰ひ相応のとぶけ入ずして母のゆるし堪忍して船中小ぐらしも在所へ仕出し居風呂とて重宝なれとて船一艘より五人十人づゝ此銭湯に入ありてあまたの銭をまうく云々」とあれば行水船よりおもひつきて居風呂船をこしらへ居風呂船より今の湯船といふものはできしなるべし

寛永正保時代銭湯風呂古圖

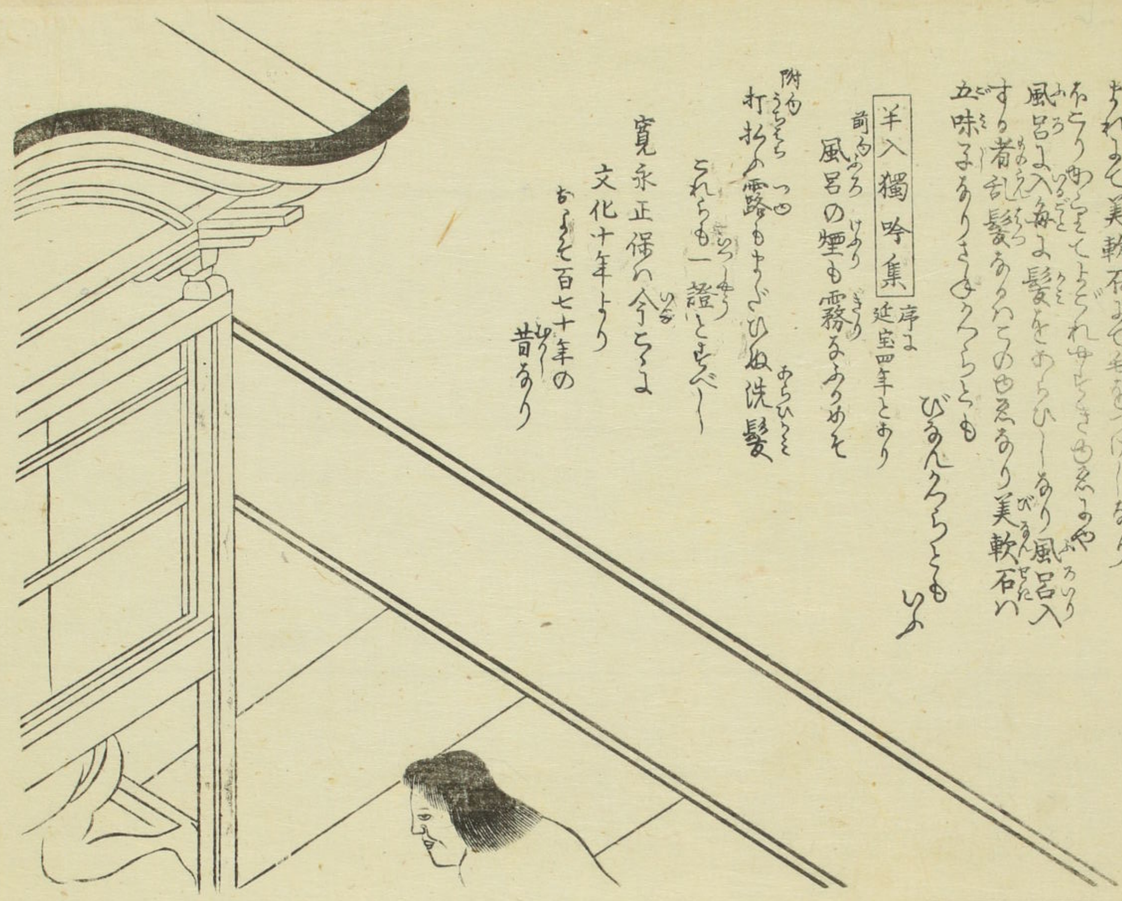
當時の男女ともに髪付油を用ゐる者
なれども美軟石のそを用をつけ〜ゐる
なりもてとてとどれもさきの色ゑこのや
風呂に入毎に髪をあらひ〜ゐる風呂入
する者は髪ゐるわこの色ゑゐる美軟石の
五味ゐるりさゆらとも

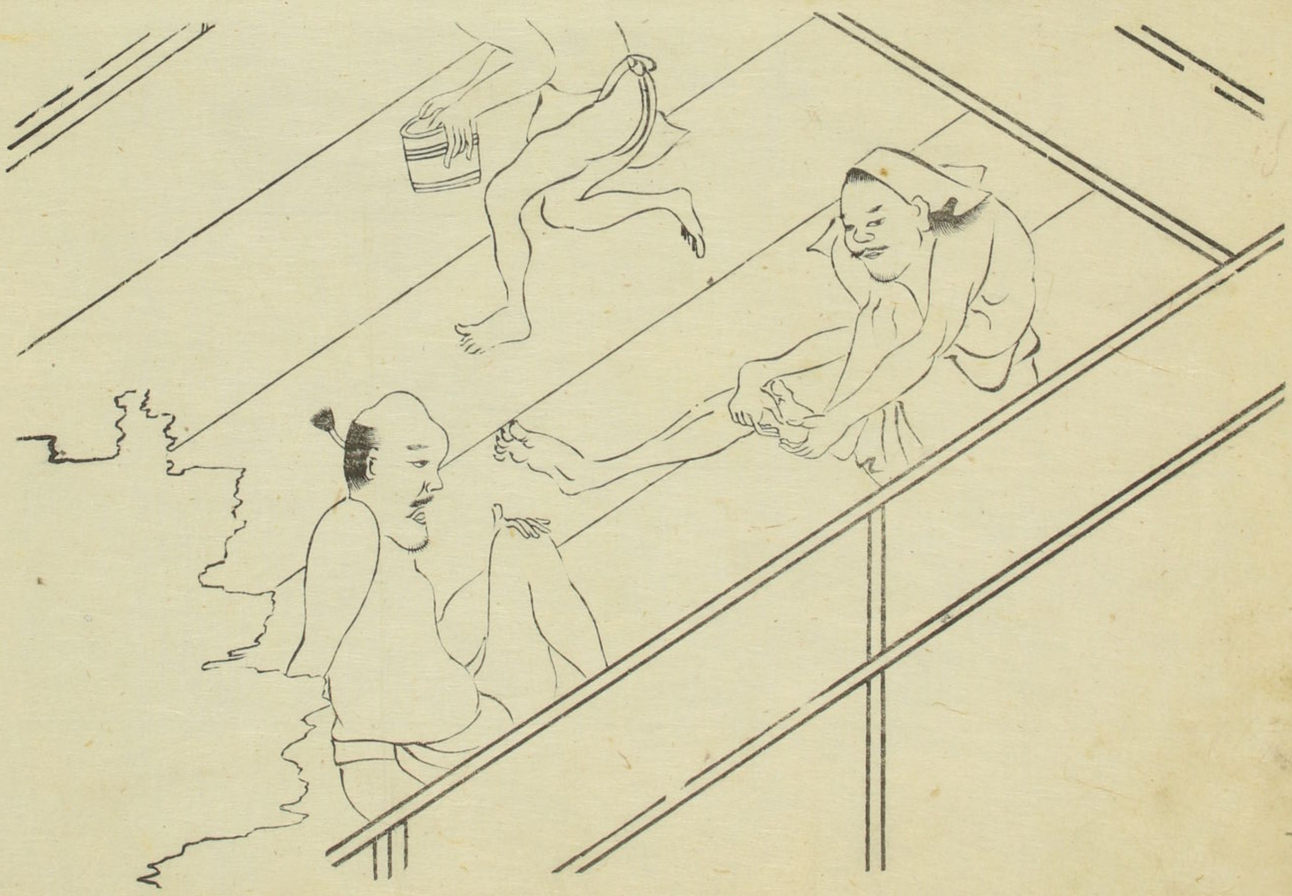
びんつらとも

前句
風呂の煙も霧ゐるゐるめを

附句
打ちの露もすゞひの如洗髪
これらも一證とゝべし

寛永正保の今ゝに
文化十年より
おゝそ百七十年の
昔ゐり





其二

当時は常に煙管をたづさへたり〻遊行の折はたづさへる事あれども〻懐中せざる奴僕は〻〻たるもの夫は〻と長きせるの頭雁の首は仰くるもの雁首の名目残れり火皿は〻と大きく

一代男

巻之二

寛永の比の風俗を〻るべし

○此婦人の髪

○此奴僕のかたち

当時は風呂敷あり風呂の敷物なり物をつゝむ料と成る風呂敷の名目残れり

○此婦人の髪は〻と長く

○此婦人の髪の結ひ方異なるべし

○男女ともに巻を〻ることあり

○古老云寛永の比の婦女の帯は廣さ〻づゝ鯨尺の二寸ばかり紙を〻と綿なども〻くとあり

○古老又云昔の婦人は髪かたく長くをたけよりまるるどのひとやめたり

〻ること此間よりあり

○石榴風呂附鏡磨 十六

醒睡笑 元和九年作 万治元年板 二之巻ニ云いづれもおなじことなるをつよたゝきをび風呂とのひたゝく
あるの戸あるを柘榴風呂といふんぞいふやめぐこゝろあり」醒ニ云ゆゝしくるい
度詞あり屈ニ入といふを鏡鑄といふとりあゝたるあり昔ハ鏡を磨ニ石榴の実の
醋を用たるゆゑあり今ハ梅の醋をうちゆ

七十一番職人尽歌合 めぐみとだの月の秋ニ
水うみやざくろのたゆをもげるをやめぐみとえる月のおりてハ
繪ニも鏡磨のめさゝらニ石榴を出たる所をうけり此歌合ハ文安宝徳のあ後ニ
つゝたゝるのとゝび因きゝるとこと久ゝ

寧武独吟千句 天文九年吟慶安五年刻
前句 ちゝやくゝろあり けをいのちあり
附句 めぐみとださ秋の中山あとえる

かゝれば天文の比も石榴を用たるべゝ是等をもて寧ニ今江戸の鐵湯ニ石榴口といふ

骨董上編 上十三

名目あるハ石榴風呂のあゝりあるべゝ然則石榴口ハ石榴風呂ニ出たる名目
ゝとゝざくろ風呂ハ鏡磨ニ出たる名目ゝ
たるとゝび物ゝゝ

七十一番職人尽
鏡磨圖

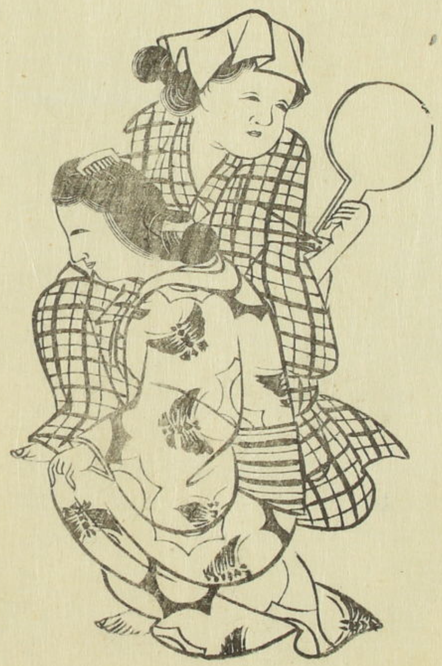
文安宝徳ハ今文化
十年ニ当ル三百
六十余年の昔ニ

○伊勢の風呂吹 十七

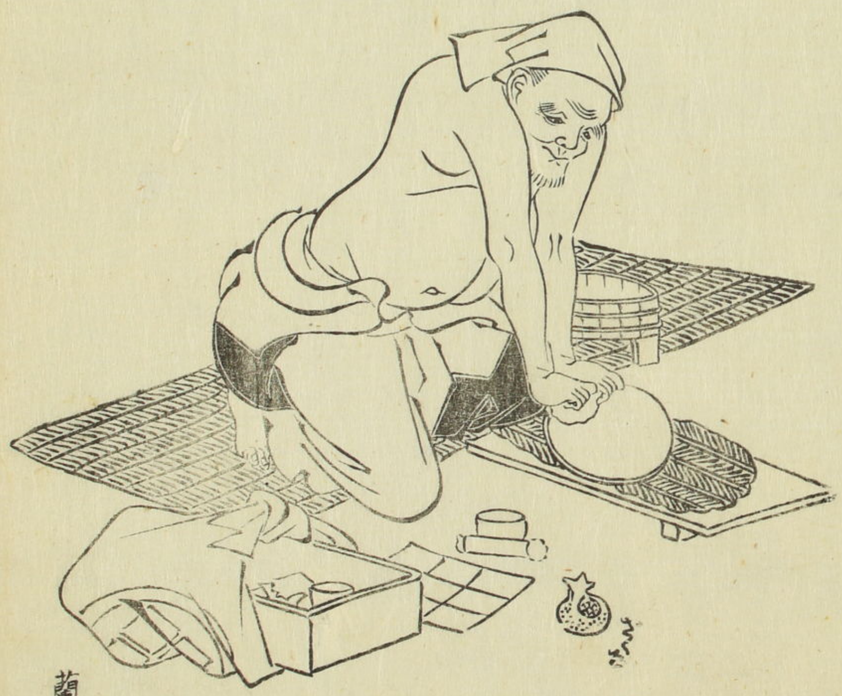
甲陽軍鑑 巻之九下 天文十四年の条ニ云「風呂ハいづれの国ニも伊勢風呂ニ
ゆ子細ハ伊勢の国元ゝ婆風呂を好て能吹ゆさるゆ分て上中下とゝもゝ教
風呂をゝゝ在郷ゝゝ大方村一ツニ風呂一ツばゝゆゝゝゝ夫ゝゝゝとゝ風呂ゝ

鏡磨古圖

画風をもて考るに此繪は貞享元禄のころ
ゑがきたらんとおもはるゝ元禄三年板 人倫訓蒙圖彙
に鏡磨あり すべて孫の子ゆりとりて根を合て
砥の粉をまぶし梅酢にてとぎとあれば當時は
石搗い用ざるべし 古画よりとぶたてあげるうや



周之元鶴岡職人尽歌合
おいの磨の哀の歌に
「霞ゆるくさわぐ草を
なりとゆてちがりゆれば
ありつげもゆ」
かれば昔酢醤草の
醋をゆらひてあぐをを
磨たるもあり」



蘭斎繪屬

ことを存ぜばあらた風呂よしと見えたりしが中はぬるき風呂に入つけたる人は熱風呂中ものに
ちゆることとあらざることにいへり「本朝諸士百家記」宝永五年印本 巻之三 潜入に舅の方にて風呂
を立てもてなしけるをいへる条に「広蓋にかけし風呂敷昔の下帯取調上手の吹手
一両人あひ催して風呂へ入ぬ云々」「自笑内証鑑」宝永七年印本 巻之五 大坂道頓堀の風呂屋
のさまをいへる条に「此風呂へ入相の比より来り吹くふうれそぞろにあがり場に坐して云々」
とあれば宝永の比まで風呂を吹といふことありしなるべし 伊勢人の物語を聞くに風呂を
吹といふは空風呂にあることなりこれを伊勢小風呂といふ 垢を掻者風呂に入者の背を
上より息を吹かけて垢をかきありふるきれば息を吹かけたる所よりおひ出て垢かき落すなり
口にて拍子をとり息を吹かけつつ垢をかくに上手下手ありて興あることなりその
さまに垢をかく者を称して風呂吹といふ今も伊勢には此事ありと語りぬ此物語
「甲陽軍鑑」に伊勢風呂とあるによくかなへり 然則 伊勢の風呂吹ふうたらとあるも
「そゞろ物語」にいへるも銭湯の名はありながら今の湯風呂にはあらでかゝる風呂

なるべし彼是を参考するに昔の風呂はむかしいはゆる風呂にてありしなるらん下帯を
して入るもむかし風呂は便宜なるべし「内証鑑」にちらしを汲といふことありもあり
湯のことをちらしといひしなり ○さて大根を熱く蒸て煙の立ほどなるを大根
の風呂吹といふも息を吹かけてくらふさまが風呂吹に似たる由なるらん

○金龍山米饅頭 十八

或説に江戸の名物米饅頭の根元は浅草聖天金龍山の麓鶴屋なり慶安の比此
家の娘におよねといへるあり此女始てこれを製しおよねがまんぢうといひしと云此説さる
たゞ擬し出せる畫のごとし延宝の比までは辻売なり米をよねといふ米まんぢうと云
も米のまんぢうと云義にて女の名によりてよびたるにはあらざるべし常のまんぢうは麩
にてつくれば也「紫の一本」天和二年 に聖天町にてよねまんぢうを商ふ根本は鶴屋といふ菓子屋と
　根本はあまたの鶴やうみぬらんよねまんぢうのためしなりけり　遺佚
かく見ゆれば天和の比は居店にて売たるならん

江戸鹿子

貞享四年印本「米饅頭屋浅草金龍山ありとや同所鶴屋」とあり

江戸咄

先板は故郷故江戸咄と題せ巻之五より真土山云々及の山の林麓のようまんぢうこと後増補し元禄七年の本あり

江戸中よりあつまる名物也云々ひとせくもり小うるよ金龍山ゑ同道ちよりぐりぐりのようまんぢうこうらのたりぐ云々」当時よりまんぢうのおとまられ

享保の比の板江戸八景の繪本より金竜山聖天より三王門ありて

ひめぢ屋ようまんぢうの庵あり近比せうぐも其ものとあるべし

延宝六年板菱川の繪本より此辻賣の畠あり

江戸鹿子

真土山の条より坂の登口又聖天町の門前も尤右ともに茶屋ありこれ此禁龍屋伊勢屋の饅頭の名物ありしそ

ようまんぢうとよび云」

とあれば伊勢屋と

ひとくるもの

りうん

これ昔よりまんぢうを入るる紙袋なり

右より引貞享板江戸鹿子より

ようまんぢうとあるべし

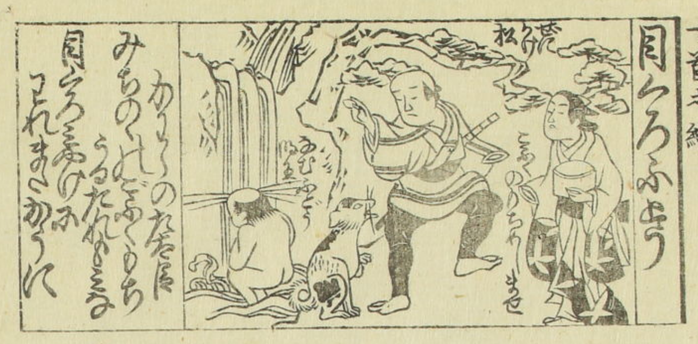
これ古屏風の下張ようの出たるを

書風あのぢうちあり中あきを

さてびあれど筆のついでよ

うつ〜りぐ〜

享保年中印本
江戸名所百人
一首之繪



○目黒の餅花 十九

昔目黒不動尊の門前にそばうの餅とりのを賣りしかお福の餅
あるを呉服のうちとあまれまとある物よりるるひいがとなるべし
愚按するに云御服のうちとあまれまとある物よりるるひいがとなるべし
松よ日毎よりのを供ずるを白服といつるも中古より後のことなるべし
うちもとと不動尊よ供ずるを白服といつるのれが赤服といひしあるべし後よ
忌服の服と同字なりを忌て博福とのひらへ福を得てつるとてろまく
手ぶみもろあしも觀音よ供ずる茶とりのちろまて赤服の茶とのことなるべし
まあれとび入しも觀音よ供ずる茶とりのちろまて赤服の茶とのことなるべし
又昔りの不動尊の境内よ大きまりしとりの

江戸八百韵 延宝六年板

剪ちやうらうと風うりたそのの滝の音 青雲
附句 目黒の原の大がとびはく 来雪

宝永忠信物語 宝永二年板 目黒のへんをいつる栗くの
栗よ花の呉服のうちと云とたり未毎よ花
目黒のうち花とのの物ひしり赤服のうちと未の杜よ
江戸砂子増補よ云目黒不動尊の飯櫃よ白
餅を入てうりのうちめぜと賣られもあるべ多詰のとうりら此餅を
買て大よあらるる云ことの清春がのれたる江戸名所百人一首の繪草紙よその畫あり摸しる
上よあらんとり

○耳の垢取 二十

江戸鹿子 貞享四年板 「耳垢取。神田紺屋町三丁目長宜とあり毎年比京よりあり」

初音草噺大鑑 元禄十一年板 巻之五元集拾遺

京羽二重 貞享三年板 「耳垢取。唐人越九兵衛とあり」

五よ「京と江戸のうちもぐるる通町のはしくよ耳垢取とて紅毛人のかくちよ似せて云く」

老人養草 正徳六年板 「云近来京師のはしくよ耳垢取とて紅毛人のかくちよ似せて云くとのれば元禄の末正徳の比よりあるべし」

五元集拾遺

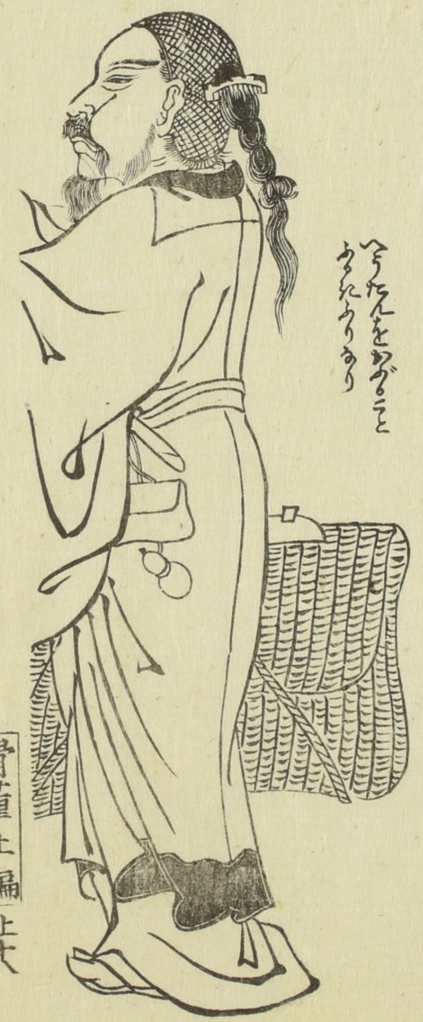
観音で耳をやらせてたとくぎん 其角

此句も耳垢取のことをいつるなるべし

一代男後日 刻板の年号なし按よ西鶴が廿五年の二之巻よ「松浦浮平戸とのの所よ
追善とのことあれば享保二年の板なるべし
くぐるる草の屋をかりて云く髪を惣ぐるぞ長崎一官と名を
ぶたる都ぐるる耳の療治人の似せまくて京の一官顔くて云くあ
よ一官といの耳の垢取あしならん

耳垢取古畫

亡友大朝此畫を模して予に与へ
接ぶられえ録なるべ
の繪なるべし



英氏画譜よも
耳垢取の畫
めれども草画を
微細なるもの
此畫と異なることなし

○臙脂繪賣　三十一

按ずるに板行の一枚繪は延宝天和の比始まれる欽朝比奇と鬼の首引土佐浄瑠璃の繪
亂の嫁入の繪の類と芝居の繪は坊主小兵衛を多くげるなど甚始まるべし　當時は
丹緑青などのみにて彩色したり菱川師宣古山師重等これを画けり元禄
のころ丹黄汁にて彩色とられを丹繪といへり元禄のころ鳥居
清信其子清倍等これを画けり宝永正徳以至て近藤清春出たり　紅繪と云は享保
のころ初創意なり墨に膠を引て光澤を出したるものなり漆繪ともいへり
奥村政信はじめこれを多くかく

近代世事談　享保十九年板　云浅草御門同朋町何某とか
者板行の浮世繪役者繪を紅彩色にして享保のころ此ころこれを賣幼童の翫びと
して京師大坂諸國へ行くとなれ又江戸一の産とありて江戸繪といへり　とあれば享保
出たる享保の比の紅繪賣の畳なるべし　板行の一枚繪のこと延宝天和と決まれば今文化十年より百三十餘年を経たるなるべし

○釜磨并猫の蚕取　三十二

西鶴織留　三之巻に云ふ〻年の師走に竈の上塗を仕はるるを手まつのひとつ
事と思ひ〻に又ちらの暮まの達者なる男が釜みがきにありきまある大釜五丈其外い
大小にてらば三文ばかりに云くまの前に人をやらぬ者い猫手にて云く又五十ばかりの男
風呂敷をうちかたりて猫の蚕を取まはるとて声立てまはりける隠居がの手白三毛を
かりて洗ひぬれ牙を其まま狼の皮にてみてたちまち抱けるうちに蚕どもぬれたる
所をうたぐとこの狼の皮にうつりけるを大道へふるひ捨ける異程の事ともそ
そも何にて分別仕出し牙色の種とかありねと云ふ　猫の蚕とりとの者のしと

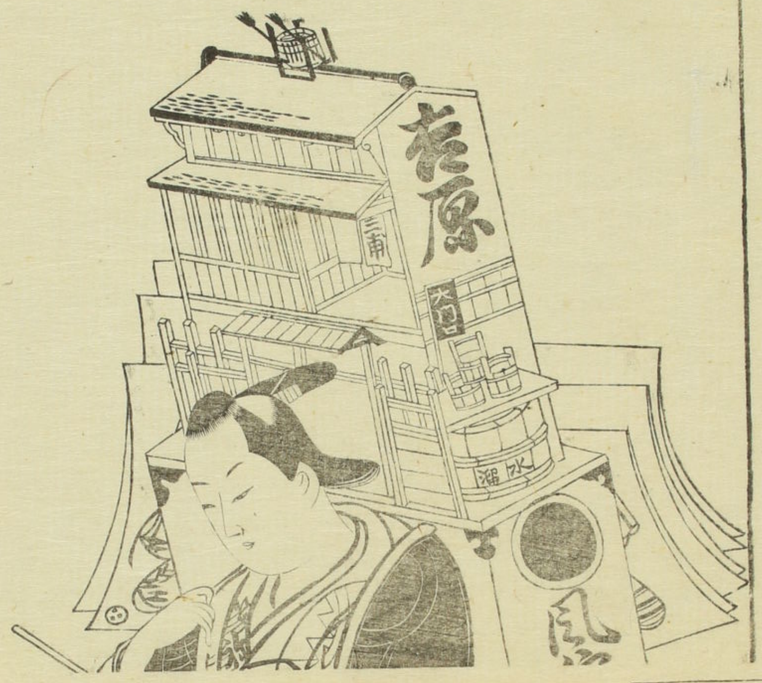
右の織留は西鶴の遺稿を正徳二年刻せるなり門人圓水の序に手書遺しと
云ふ酉の葉月に此書を去ぬとあるは元禄二年とあるべし時代をまちがへり

舞のみち　元禄十七年板の序に云ふ大坂の西鶴が咄にひさの風呂敷つくりをせるのにかをりて猫の
蚕とりとのひとつ過たる者ありと語られ〻云ふ　とかくたれば此事なるべしと

臙脂繪賣圖

べにえうりのづ

これは享保のころの一枚摺の板行繪なり



曙雲斎藏

○おぶとりひとてび　二十三

御伽婢子に天倪の略制あり小兒のあららよ置邪崇をあいをる形代あり　雍州府志

天和二年撰　土産門小云白絹を以て人形を造り内に糟糠を充外白粉を施せ豆を御伽母子と

いの此偶人元大小母子の形を造る始母子人形と称ど今人形の字を畧して云ことの如し　原書漢文

今ろる物まび母ろをこうこと引てのひそとあと通音あれびやうとものるべ〜そそ人老

耄て小兒の如くよりたるを二度おぶとりの女子の幼氣あるをおぶと娘とのみ競のるをおぶと

といたちびもべて幼をおぶとりのられ右の御人形うり出たるこびあて御婢子をたぐめたる

こびるやとありるるらに清てのべたとびあり　合類節用　恍惚子の三字をお

ぶとと訓ど字書をるよ恍惚の字義に今いのあぶとの義まおあらざ故とおのれが

推當言よておぶつあけれどあとありひよせたるまに明にでもあたるあり

○駒形の螢　二十四

江戸雀　延宝五年印本　十之巻浅草駒形堂の条に云「此堂は二間四面南向なり三尺ばかり

力を催さ人に此川よりを取て浅草へ参るとことに飛つたよりて出飛入飛のあま

さ多い幸を浦の波帆とやヤさん九夏三伏のあるた比い風もぐ寒に吹あるこびるの

螢水よりたり勝景めぐりるた所るり」とあり繪をるるに堂のあらたに樹木ある

殊をるるり又　江戸名所記　寛文二年板　の駒形堂の畫をるるに木立蔭あどありて螢もるるぶ林く

鳶尾琴　元禄十四年板　こ岡りさに飛をとをて　此碑ぐは江を衰ヤぬ螢沈

ゆ〜ものも眼前の体るぶ〜今い形ぐ人荒立つきて螢よ化たぶた草だよ〜ぶるよ百餘年を

経て繁花の地とるりぬ○元禄六年駒形よ殺生禁断の碑立今あ不存ぜり右の句意を考るよ

衰江頭い杜子美が七言古詩の題ぐ衰江の字義をとり此碑立ぐ此川のうとのみ〜ぶとあるこびと

ぶるこるるらん螢の光よ碑文をてらをを車徹が故事るどるもあるひをたる歟

○浮世袋　二十五

或人古老の説ありとて語て云幼女子針業をあらの婢よ浮世袋とのの物をこつ色ち

縫て玩物とて綿を三角よ縫綿を入れて袋めり〜て上の角よ糸をたくる何の用

あた物あれども唯針業をあらのあるよたるあり黄の狂女よたるあるを浮世ぶるひとのひ〜

あそびの家の前よ柳を二本植て横手を結暖帝を掛とれよあそびの名を見た其やよ

物の袋めく物をこづくら縫て浮世袋といひあらつたるありといつてを

五人娘 貞享三年板 巻之一に浮世ごろひとつのことあれば貞享の比もぐものひたることなるべし

又巻之三に浮世笠といふあり 一代女 貞享三年板 浮世髻 卵子酒 序に宝永六年とあり 浮世巾著あど

いの名目ゑんたいを無ゆゑ類あらん 栗嶋といふ踊歌の文句をれ針ぐらを縫うき世袋

雛形とあらべいかゝ今栗嶋の神に手向る三角の袋めく物い則浮世袋あることを

知りぬられいとゆる謡歌の説をとるあこるある考と我あぐらを栗嶋の神を女神と

謬るより童女針業に達きる額をとりけゝ浮世袋を手向るゝあらん

○初雪の句 三十六

初雪や犬の足跡梅の花と云句い何人のいひいづたるゝ 童もらをきむ句 五元集をの

鶏合の巻三云 雞去画竹葉是い五山汎の僧雪の聯句ゆ犬走生梅花といふ對あり云々

右の聯句よりとづく歌或い暗合したる歟

○燈籠踊の古畫 二十七

都歳時記 序文延宝二年とあり 巻之四に云長谷岩蔵花苑にそなへ六字の念仏にあをを分さめぐの花をかざり灯をたてしたる四角なる灯籠を戴てをどるいづれも肝にいりたるひとつきはめて品あるつゆ都にもちゐどをり〳〵已此所にて氏神の前より踊ちゐ其年みやうをたる亡者ある家に行て夜更までをどりくるをを例年すくれたるつゆあれば由来なるべしもあらじあれどたゝうに知者あるとやいへ

日次紀事 に云洛北岩倉花園両村の年の女子各大灯籠を戴八幡の社前に聚て男子大鼓を撃笛を吹踊を勧む是を灯籠踊といふ呼戴頭上の灯籠踊る女子の家に春初よりこれを造り互に其作る所の模様を秘を 糸書漢文 今案ずるに右に摸〳〵あらはし其古昔なり

骨董集上編上之巻終